或問　WAKUMON　77
No.25,（2014）pp.77-86

江戸時代に中国から輸入された集帖『顔真卿三稿』について

馬　成芬

提要：江户时代日本的长崎作为唯一的对外贸易港与中国和荷兰进行对外贸易。通过与中国的贸易输入到日本的贸易品中，也包含了很多书籍。在被输入的书籍当中，书道资料也作为其中的重要贸易品输入到了日本。在由中国商船也就是当时的“唐船”舶运过去的书道资料中就有收录了众多著名书道家书迹的集帖。在对这些集帖的输入数量进行统计时发现，共输入了 465 次，153 种集帖。在这些被输入到日本的集帖中，就有唐代著名书法家颜真卿的《颜真卿三稿》。本文就以《颜真卿三稿》为中心，探明其作为贸易品输入到日本的状况。

关键词：江户时代　日本　长崎贸易　颜真卿　颜三稿

はじめに

江戸時代において徳川幕府は「鎖国」政策をおこなっていたが、長崎が唯一の港として中国とオランダとの間で海外貿易を展開した。その結果、中国からもオランダからも輸入された貿易品はすべて長崎を経由して日本国内に流入することになった。日本に輸入された中国貿易品のうち、書道関係の資料とくに著名な書家の書跡を収録した冊子として「集帖」があり、その集帖の書籍輸入に占めた割合は極めて高いと言える。[1]江戸時代における日本に輸入された中国集帖に関しては、大庭脩氏の「江戸時代における集帖の輸入」[2]がある。大庭氏は、集帖が書道関係の資料として大量に日本に輸入されたことを明らかにした。とくに大庭脩氏の蒐集された『商舶載来書目』と『齎来書目』と『長崎会所取引諸帳』[3]に依拠して輸入された集帖について統計[4]すると、『顔真卿三稿』は輸入された回数でも部数でも高い割合を占めている。

そこで、本稿は『顔真卿三稿』が輸入された年代、回数と部数に関して統計するとともに、その輸入後の状況について究明したい。

---

[1] 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版 1984 年 6 月、406-420 頁。

[2] 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版 1984 年 6 月、406-420 頁。

[3] 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版 1984 年 6 月、110-117、139-152、154-157 頁。

[4] 馬成芬「江戸時代における中国集帖の輸入について」、『文化交渉』関西大学大学院東アジア文化研究科院生論集、第 3 号、掲載予定。

一、顔真卿と『顔真卿三稿』

中国唐代の書家として著名な人物を掲げるとすれば顔真卿（709-786 頃）を第一にあげなければならないであろう。顔真卿は、安史の乱に義勇軍を率いて抗戦し、その後は、諸官を歴任したが、李希烈の乱の際に殺害された人物[5]であるが、その書は楷書、草書に新生面を開いた力強い書法をもって知られた。そのため彼の書跡は永きにわたって大きな評価を受け、現在でも高い評価を受けている。

そこで初めに顔真卿の書家としての経歴を述べてみたい。

『舊唐書』巻一二八、顔真卿傳には次のようにある。

> 顔真卿字清臣，琅邪臨沂人也。五代祖之推，北齊黃門侍郎。真卿少勤學業，有詞藻，尤工書。開元中，舉進士，登甲科。事親以孝聞。[6]

『新唐書』巻一五三、顔真卿傳にも、

> 顔真卿字清臣，祕書監師古五世從孫。少孤，母殷躬加訓導。既長，博學，工辭章，事親孝。[7]

とあるように、両『唐書』ともに、顔真卿は博学で、書に巧みであったと記している。

顔真卿はその後も高い評価を受け、宋代の蘇東坡をはじめ、清代の何紹基まで、書法において顔真卿の影響を深く受けた。

『古今源流至論』前集巻三の記載によると、

> 昔東坡嘗言、詩至杜子美、書至顔魯公、及題唐書後、又曰：顔魯公書、雄秀獨出、如杜子美詩、格力天縱、…盖顔之筆態、有天縱自然之妙、即杜詩之自為一家也。顔之精神、形於以死赴國之時…[8]

と記され、蘇東坡は顔真卿の書法について、誰もが及ばない書法であると高く評価したとされている。

清代においても著名な書家である何紹基が『清史稿』巻四八六、文苑三、何紹基傳に、

> 何紹基，字子貞，道州人，尚書淩漢子。道光十六年進士，選庶吉士，授編修。紹基承 家學，少有名。阮元、程恩澤頗器賞之。歷典福建、貴州、廣東鄉試，均稱得人。咸豐二年， 簡四川學政。召對，詢家世學業，兼及時務。紹基感激，思立言報知遇，時直陳地方情形， 終

---

5 『舊唐書』巻一二八、顔真卿傳、『新唐書』巻一五三、顔真卿傳参照。

6 後晋劉昫等撰『旧唐書』巻 128、中華書局 1972 年 3589 頁。

7 宋欧陽脩等撰『新唐書』巻 153、中華書局 1972 年 4854 頁。

8 王雲五主編『四庫全書珍本』十二集巻 146、宋林駉撰「古今源流至論」前集巻三、台湾商務印書館 1982 年 5 頁。

以條陳時務降歸。歴主山東濼源、長沙城南書院，教授生徒，勗以實學。同治十三年，　卒，年七十又五。紹基通經史，精律算。嘗據大戴記考證禮經，貫通制度，頗精切。又為水經注刊誤。於説文考訂尤深。詩類黃庭堅。嗜金石，精書法。初學顔真卿，遍臨漢、魏各碑至百十過。[9]

とあるように、何紹基も書法の基礎は顔真卿の書に学んだとされる。

清代の孫岳頒等撰の『佩文齋書畫譜』巻二十八、書家傳七、唐三、顔真卿の条に、

顔真卿、字清臣、琅邪臨沂人。祕書監師古五世從孫、少孤、博學工辭、開元中、舉進士、擢制科、天寶末、出為平原太守。歴遷刑部、尚書太子太師贈司徒、謚文忠、真卿立朝正色、剛而有禮、天下不以姓名稱、而獨曰魯公、善正草書、筆力遒婉、世寶傳之。[10]

とあるように、顔真卿の書は草書と楷書に優れ、力強い筆法で知られていた。

このように顔真卿の書は後生の書家にも大きな影響を及ぼしたのである。

顔真卿の書は書体によって、楷書と行草書とに大別される。楷書作品にはより大きな楷書で碑文として作成されたものがある。例えば、「顔勤礼碑」、「麻姑仙壇記」、「大唐中興頌」、「顔氏家廟碑」等々である。また紙とか絹とかに書いた「告身」すなわち、唐代の辞令書書である。例えば顔真卿の書した「朱巨川告身」[11]である。この「告身」も大きな楷書で官職委任書のために書かれたものである。行草作品には「裴将軍詩」のように楷書、行書と草書三種類の書体を混ぜて一体にした作品もある。普通の行草作品もある。例えば、先に触れた『顔真卿三稿』である。

「顔三稿」は、『顔真卿三稿』とも呼ばれ、「祭姪文稿」、「告伯父文稿」及び「争座位帖」を指す。三稿と呼ばれるのはこの三つの作品がすべて草稿であることからである。

「祭姪文稿」は、「祭姪稿」、「祭姪季明文」、「祭姪文」、「祭姪帖」とも呼ばれる。顔真卿は蒲州（今山西省）で刺史であった時に、安禄山の乱に殉じた姪の顔季明を祭った文の草稿である。顔季明は顔真卿の兄、杲卿の末子であった。安禄山の乱に際し、常山太守顔杲卿は、子の季明とともに兵を起こし賊を防いだ。しかし、最後に「贼臣不救。孤城围逼。父陷子死。巢倾卵覆」[12]と、父子ともこの戦乱のために惨死したのである。この文稿は計 23 行、234 字を数え顔真卿の 53 歳の時、すなわち乾元元年（758）9 月に書かれた。古くからこの文稿を諸跋が高く評価したことが見られる。『竹雲題跋』に、

---

9 趙尔巽等撰『清史稿』巻 486、文苑三、吉林人民出版社 1995 年 10201 頁。

10 孫岳頒等撰『佩文斎書畫譜』28 巻、「書家傳七」、上海同文図書館 1920 年 44－45 ページ。

11 孫岳頒等撰『佩文斎書畫譜』巻 74「暦代名人書跋」五によると、「唐顔真卿朱巨川誥」とある。上海同文図書館 1920 年 3 頁。

12 顔真卿『祭姪文稿』

> 魯公三稿皆奇、而祭姪稿尤為奇絶、蓋泉明以公命購杲卿、季明屍于洛陽河北。杲卿僅得一足、季明僅得一首、魯公痛其忠義身殘、哀思勃發、故縈紆鬱怒、和血迸泪、不自意其筆之所至、而頓挫縱横、一瀉千里、遂成千古絶調。[13]

とある。顔魯公すなわち顔真卿は、きわめて激昂の状態で書いたが、その書法は極めて優れており、後世の人々から高い評価を受けた。

「告伯父文稿」は、「祭伯父濠州刺史文」や「祭伯文」とも称される。この文の草稿は『祭姪文稿』を書き終えた翌月すなわち乾元元年（758）10 月に書かれた。これは顔真卿が蒲州刺史から饶州刺史に転任した途中で、没した伯父およびその一門の物故者を祭るために書いた告文の文稿である。36 行、410 字からなる。伯父とは顔元孫のことであり、すなわち上述した顔杲卿の父、顔季明の祖父である。この文稿についても『竹雲題跋』に、

> 山谷老人論、争坐書猶不及祭濠州刺史之妙。蓋一紙半書、而真行草法兼備也。弇州山人云、此帖與祭季明姪稿法同、而頓挫鬱勃、少似遜之、然風神奕奕、則祭季明姪稿小似不及也。[14]

とあるように、「告伯父文稿」を「祭姪文稿」と比べると、おのおのの特色があるが、「告伯父文稿」の書風の方が、書の勢いがより強いとされた。

「争座位帖」は、「論座書」、「争座帖」、「与郭僕射争座位帖」、「与郭僕射書」などの呼称がある。この文稿は広徳二年（764）、56 歳の時に書かれたものである。『竹雲題跋』に、

> 此魯公與郭英乂書、英乂為尚書右僕射、封定襄郡王、驕蹇泰侈、陰事元戎、魚朝恩以固其權時、郭子儀大破吐蕃於長安、朝臣徳之為、興道之會、英乂擠八座、尚書坐朝恩下、公移書糾正之。[15]

とあるように、尚書右僕射郭英乂は朝廷礼儀に違反し、尚書の座位を朝恩の下に置かれた。これは顔真卿がその不正な行為を指摘するために郭英乂に書いた文稿である。この文稿の書風について、『竹雲題跋』にも記録がある。

> 東坡稱其、信手自然、動有姿態、比公他書尤為奇特。山谷亦云、奇偉秀拔、奄有魏晉隋唐以來風流氣骨。米元章云、争坐位帖為顔書第一、字相連屬、詭異飛動、得于意外。蓋由當時義憤勃發、意不在書、故天真爛然、自合矩度。[16]

と、蘇東坡と黄庭堅や米芾のような大家は、この文稿が顔真卿の他書よりも最も優れていると

---

[13] 明王澍撰「竹雲題跋」巻四、厳一萍編集『百部叢書集成』巻 60、台北芸文印書館 1967 年頁。

[14] 明王澍撰「竹雲題跋」巻四、厳一萍編集『百部叢書集成』巻 60、台北芸文印書館 1967 年 10 頁。

[15] 明王澍撰「竹雲題跋」巻四、厳一萍編集『百部叢書集成』巻 60、台北芸文印書館 1967 年 7 頁。

[16] 明王澍撰「竹雲題跋」巻四、厳一萍編集『百部叢書集成』巻 60、台北芸文印書館 1967 年 7 頁。

いう一致した評価を得ているのである。

以上のように、『顔真卿三稿』の内、いずれが優れているかは、鑑賞する人によって評価が異なっている。

顔真卿の『顔真卿三稿』は、その後も多くの集帖に収められた。それらを容庚の『叢帖目』[17]によって整理したものが次の表 1～3 である。

表 1　現存の「集帖」に見られる「祭姪文稿」

集帖名	制作年代	製作者	巻
博古堂帖	宋	石邦哲摹勒	
停雲館帖十二巻	明嘉靖 16-39 年（1538－1561）	文徵明撰集、子文彭、文嘉摹勒	唐人真跡巻四
余清斎帖存八巻	明万歴 24-42 年（1596－1614）	呉廷摹勒	第四冊
戯鴻堂法書十六巻	明	董其昌摹勒	巻九
玉煙堂帖二十四巻	明万歴 40 年（1612）	陳瓛撰集	巻十六
潑墨斎法書十巻		王秉錞摹勒	巻八
清鑑堂帖十巻	明崇禎 10 年（1637）	呉楨摹勒	巻五
穰梨館歴代名人法書八巻	光绪 8 年（1882）	陸心源撰集，胡钁摹刻	巻二
隣蘇園法帖八巻	光緒 18 年（1892）	楊守敬撰集	巻六
壮陶閣帖三十六巻	民国元年（1912）	張松亭等摹勒	巻五
忠義堂帖一巻	清咸豊 11 年（1861）	唐顔真卿書、張穆摹刻	
唐宋名人帖四巻	宋淳熙 3 年（1176）	趙彦約摹勒	唐名人帖巻二
唐宋八大家法書十二巻	清乾隆 52 年（1787）	姚学経撰集	巻四　唐颜真卿書
平遠山房法帖六巻	清嘉慶 7 年（1802）	李廷敬撰集、湯銘等摹勒	第二册
戯魚堂帖十巻			巻十
星鳳楼帖十二巻			巻十一　唐
秘閣帖十巻	宋宣和 2 年（1120）		巻八

[17] 容庚（1894－1983）『叢帖目』中華書局 2002 年。

表 2 現存の「集帖」に見られる「告伯父文稿」

集帖名	製作年代	製作者	巻
博古堂帖	宋	石邦哲摹勒	
海山仙馆摹古十二卷	咸丰 3 年(1853)	潘仕成撰集	卷八
澂观阁摹古帖四卷	咸丰初年(1851)	伍保恒撰集	卷三
穰梨馆历代名人法书八卷	光绪 8 年(1882)	陆心源撰集,胡钁摹刻	卷二
壮陶阁帖三十六卷	民国元年(1912)	张松亭、唐仁斋、陶昕泉摹勒	卷五
唐宋名人帖四卷	宋淳熙 3 年(1176)	赵彦约摹勒	唐名人帖卷二

表 3 現存の「集帖」に見られる「争座位帖」

集帖名	年代	制作人	巻
博古堂帖	宋	石邦哲摹勒	
戲鴻堂法書十六巻	明	董其昌摹勒	巻八
玉煙堂帖二十四巻	明万歷 40 年(1612)	陳瓛撰集	巻十六
墨妙軒法帖四巻	清乾隆 20 年(1755)	蒋溥、汪由敦等編、焦国泰鐫刻	巻二
玉虹鑑真帖十三巻	清乾隆年間	孔継涑摹勒	巻四
契蘭堂法帖八巻	清嘉慶 10 年(1805)	謝希曾撰集	巻三
穰梨馆历代名人法书八卷	清光緒 8 年(1882)	陆心源撰集,胡钁摹刻	卷二
壮陶阁帖三十六卷	民国元年(1912)	张松亭、唐仁斋、陶昕泉摹勒	卷五
顔魯公帖八巻、続一巻	宋嘉定 8 年、10 年(1215、1217)	留園剛刻 鞏嵘続刻	巻一

以上のように顔真卿の書風は、彼の死後も高い評価を受けていることがわかる。さらに顔真卿の名跡が集帖の形態で、江戸時代の日本に大量に輸入されていた。これについて次節で述べたい。

二、江戸時代の日本に輸入された『顔真卿三稿』の状況分析

大庭脩氏の蒐集された『商舶載来書目』と『齎来書目』と『長崎会所取引諸帳』[18]などにより、

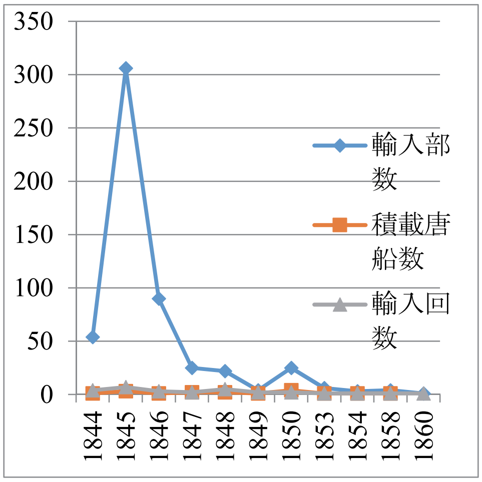
[18] 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版 1984 年 6 月、110-117、139-152、154-157 頁。

江戸時代の日本に輸入された『顔真卿三稿』の統計結果は次の表 4 である。輸入の推移を図式したものが次のグラフである。

表 4 江戸時代の日本に輸入された「顔真卿三稿」の一覧表

輸入年代	積載唐船名	輸入回数	輸入部数
1844（天保 15 年）	辰四番船	4	54
1845（弘化 2 年）	辰四、五、六、七番船	2	153
	巳二番船	1	133
	巳六番船	4	20
1846（弘化 3 年）	巳三四五番船	3	90
1847（弘化 4 年）	午二番船	1	20
	午一番船	1	5
1848（嘉永元年）	未二番船	3	7
	申一番船	2	15
1849（嘉永 2 年）	酉三番船	2	4
1850（嘉永 3 年）	酉五番船	3	17
	戌一番船	1	8
1853（嘉永 6 年）	子四番船	1	6
1854（嘉永 7 年）	寅一番船	1	3
1858（安政 5 年）	午一番船	1	4
1860（安政 7 年）		1	1

表 4 とグラフに示したように、顔真卿の『顔真卿三稿』が日本に輸入されたのは天保十五年（1844）からであった。この年に 4 回、54 部が輸入された。弘化二年（1845）には、輸入回数や部数でも最高値に達し、7 回、306 部であった。翌年の弘化三年（1846）は、回数と部数が両方とも前年より下がっている。しかし、最初の天保十五年（1844）と比べると、それよりも多いことは明らかである。弘化四年（1847）から一隻か二隻の唐船によって輸入されており、回数と部数は前の二、三年目と比べ、数量がかなり下っている。安政七年（1860）は、一帖、一部であり、その後は輸入の記録が見られない。



このように、『顔真卿三稿』は、1844（天保 15 年）から 1860（安政 7 年）までの 16 年間に 540 部が輸入され、とくに弘化二年（1845）は、一年のみで 306 部に達した、ここに示した輸入部数の約 57%にものぼっている。

それでは弘化二年（1845）頃に、日本において顔真卿に関する流行があったのであろうか。その手がかりを江戸時代の記録から探ってみたい。

江戸時代における顔真卿の評価について次の記録が知られる。江戸時代中期の岡山藩士であり儒学者として知られる湯浅常山（1708-1781）が、『文會雑記』巻三、上に、

> 顔魯公ノ手跡ハ、人ガラノ通リスルドキ手ナリ。[19]

と、多くの人々から呼称された魯公の名称で顔真卿を敬称して、その名跡を高く評価していたことがわかる。このように江戸期の文人の間でも顔真卿の書跡は高い評価を受けていたことがわかる。

さらに湯浅常山は、『文會雑記』巻二上に、

> 顔魯公法帖一冊、宝暦三年癸酉新刊ス。外題に顔真公墨妙トアリ。唐政通議大夫行薛王友柱国、贈秘書少監国子酒太子少保顔君廟碑銘なり。井子叔云、是榻本大ニ刻アシク神采ナシト云。誠ニ然リ。シカレドモ魯公ノ法ヲミツベキハ、和刻コノ本ナリ。[20]

顔魯公法帖一冊、宝暦三年（三年、乾隆十九、1754）の新刻が日本で出版されたようである。外題に顔真公墨妙とある。この法帖は顔君廟碑銘である。井子叔はこれが拓本で、神采がないと言う。しかし、顔真卿の書法に関心が持たれていた証拠といえるであろう。「顔魯公法帖」に関して、小野碧海（寛蔵）編『宋名家題跋』下[21]に、

> 唐顔魯公二十二字帖
> 　斯人忠義出於天性、故其字畫剛勁獨立、不襲前蹟、挺然奇偉、有似其爲人。
> 唐顔魯公法帖
> 　右顔真卿書二帖、并虞世南一帖、合爲一巻、顔帖爲刑部尚書時、乞米於李大夫云。拙於生事、擧家食粥來、已數月、今又罄乏、實用憂煎、蓋其貧如此、此本墨蹟、在予亡友王子野家、子家在於相手家、而清苦甚於寒士、嘗撲刻石、以遺朋友故人云、魯公爲尚書、其貧如此、吾徒安得不思守約、世南書七十八字、尤可愛。在智永千字文後、今附於此。

と、顔真卿の二十二字帖と書の法帖について記している。

このように江戸から明治期にかけて日本で顔真卿の書に関心がもたれたのであった。とくに

---

19 『日本随筆大成』第一期第 14、吉川弘文館、1975 年 12、291 頁。

20 『日本随筆大成』第一期第 14、吉川弘文館、1975 年 12、223 頁。

21 小野碧海（寛蔵）編『宋名家題跋』奎文堂、1886 年 9 月。国立国会図書館デジタルコレクションによる。

明治時代において出版された『顔真卿三稿』に関する和刻本等について、全国漢籍データベースを参考に整理したものが次の表 5 である。

この表 5 からも明らかなように、明治期の日本では顔真卿の『顔真卿三稿』に関する人気は高かったことが知られる。

『東京朝日新聞』第 13127 号、大正 11 年（1922）12 月 18 日付の「顔真卿の真筆」の記事が、大正期の顔真卿の書に対する関心の度合いが知られる。

> 来朝中の支那名士顔世清氏の寒木堂蔵書畫展覧会は應十八、九及び二十一、二の四日間に亙り麹町永田町支那公使館に開かれる、十七日午後二時から五時までの間に百三十点の名品中特に代表的と目される五十点余を同公使館舞踏室内に陳列して知名士、愛好家、専門家等を招待内見の便に供した、午前中公使館員の手傳ひてやつと陳列を仕上げた當の顔氏は「とつておき中のとつておきといふ所を述べたんですが、どうです、これが五代遺源ですこれが宋李公慶の白描闇巻です、いいてせう」と得意満面胡公使までが一緒になって、・・・

とあるように、東京にあった中国の公使館で開催された展覧会に、50 種類の顔真卿の真筆とされる書が展示され、数百名の参加者あったことを伝えている。

表 5 明治時代に出版された『顔真卿三稿』に関係する和刻本一覧表[22]

作品名	日本暦	西暦	出版社	所蔵
祭姪帖	明治 15 年	1882	大藏省印刷局	関大
顔魯公三表眞蹟	明治 15 年	1882	大藏省印刷局	東大総
顔魯公爭坐位帖	明治 15 年	1882	大藏省印刷局	宮城教育大学
（顔魯公）三表眞蹟	明治〔15 年〕	1882	大藏省印刷局	東京都立 中央
顔魯公座位帖	明治		大藏省印刷局	国会 東京
（顔魯公）〔爭坐位帖〕	明治		大藏省印刷局	東京都立 中央
（顔魯公）祭姪稿	明治		大藏省印刷局	東京都立 中央

このように、日本では江戸時代のみならず明治、大正においても顔真卿の書風は高い評価を得ていたことがわかる。

三、小結

江戸時代日本の長崎は唯一の対外貿易港として中国とオランダとの貿易が行われていた。そ

---

22 京都大学漢字情報センターのデータベースを参照した。

の中国との貿易を通じて輸入された貿易品に書物も多く含まれていた。その書籍の中には書道資料も重要な貿易品として輸入された。とりわけ中国商船で舶載された書道資料に著名な書家の書跡を収録した冊子として集帖があった。その集帖の輸入数量を統計すると、輸入頻度は 465 回、153 種に達している。その輸入された集帖の中に唐代の有名な顔真卿の『顔真卿三稿』が知られる。『顔真卿三稿』は、「顔三稿」とも呼ばれ、「祭姪文稿」は、安禄山の乱に殉じた姪の顔季明を祭った文の草稿で、「告伯父文稿」は、安禄山の乱の時期に殉じた伯父およびその一門の物故者を祭るために書いた告文の文稿であり、「争座位帖」は朝廷における官位の座席順位の不正を糾弾した書である。この三稿が、後世の行草書の書風に大いに影響を与え、江戸後期の日本にも強い関心が持たれて、大量に輸入されていたのである。

『顔真卿三稿』の清代中国から江戸日本へ大量に輸出されていた事実は、東アジアにおける中国書道史を考察する上でも極めて重要であろう。